

平原から纏向へ—日の出暦の移設—

東海大学教授・奈良女子大学客員教授 北條芳隆

はじめに

今回は考古天文学からみた奈良盆地の景観設計を取り上げます。東アジアの場合、どのような景観のなかに居住地や墓を置き据え、どこで祭礼を執り行うべきか、という景観設計は風水思想に代表され、大枠が定まったのは前漢代だといわれます（渡邊1990）。

この風水とも絡み合いながら古代諸王朝の都城は営まれました。都城の方位の問題を掘り下げた楊寛氏は、前漢代までの都城は「坐西朝東」の配列が基本であり、後漢代以降は「坐北朝南」の配列へと転換したと指摘します（楊1987）。前者は太陽や月の運行に依拠する古相の方位観念であり、後者は天の北極「北辰」に依存する新相の方位観念です。

同時代の日本列島はどうかといえば、弥生文化の倭人が重視したのは日没方位の「去にし」ではなく日の出側の「日向かし」だった可能性が高く、中国側の古相の方位理念を裏焼にした「坐東朝西」だったといえそうです。ただし佐賀県吉野ヶ里遺跡北内郭のように、信仰の対象になったのは日の出だけでなく満月の出でもあったことがわかりました（北條2022a）。その成果を組み込んだ8分間の映像も今回ご覧頂きます。キーワードは冬至の朝日と冬至付近の満月です。

なお私が重視するのは暦の問題です。縄文文化と弥生文化の人々は自然暦を使用したといわれます。四季折々に変化する情景や寒暖を基準に1年を捉えた段階、太陽の出没地点の変化を見据えた日の出・日の入暦をもちい「日知り＝聖」を輩出した段階、月の満ち欠けを基準に朔望月を捉える「月読み」を輩出した段階までの諸案が示されています（岡田1982, 齊藤1992, 荒川2001, 細井2008）。一方、同時代の中国側には天文観測にもとづく太陰太陽暦がありました。このような中国暦法が倭国に移植されたのは、倭の五王が南朝の宋と交流をもった5世紀以降であったとされます。

では上記の前提認識をふまえ、弥生時代から古墳時代までの奈良盆地の景観設計を考えます。私が今回提示する見解は、北部九州の弥生文化に限れば、後漢の暦が倭人側の日の出・日の入暦に模倣・転写された可能性は高いという結論であり、それが奈良盆地にも二次的に波及したという見解です。表題はこのことを指すのですが、では本論に入ります。

1. 唐古・鍵遺跡と日の出暦の導入

すでに何度か言及したとおり、田原本町唐古・鍵遺跡からみた東側の龍王山一帯は日の出の峰でした。夏至は高橋山からの日の出となり、春分・秋分は龍王山520mピーク（北尾根）からのそれ、立春・立冬は巻向山から、冬至は三輪山からの日の出となりました。この遺跡は奈良盆地の中央に位置しますから、日の出暦の観測場所としても適していたのです。図1は紀元前2世紀末の時点における年間の日の出範囲と、目安となる峰峯を示したものです。

このような主要な峰峯からの日の出が年間の節目の期日と一致する地点が選ばれたのでしょう。この地に稲粍をはじめとする稲作体系を導入したのは北部九州地域の渡来系弥生人であったことも確実なので、日の出暦の体系も北部九州側から伝えられた可能性は高いとみるべきです。年代は紀元前5世紀代（板付2b式期）頃と推定されます。

初期の段階では、日の出範囲の南北両限界としての認知形態だったのですが、年間の節目としての〈二至〉は確実に了解されていたはずで、また双方の中間点として〈二分〉も把握されていた可能性があります。そのうえで、たとえば龍王山山頂から高橋山までの間の任意の稜線や窪みを選定すれば、夏至からほぼ同日数を隔てる春秋一対の日取りが自動的に設定されるので

す。たとえば山桜が咲き始めた日の朝日が昇った峰に照準を合わせれば、4月上旬と共に9月上旬が自動的にセットされるという仕組み（両日は太陽の赤緯がほぼ同値になるから）です。この原理に沿って稲の生育期間との調整を図ればよく、日の出暦は奈良盆地に適した農事暦としても運用されたに違いないのです。

なお弥生時代中期後半の前1世紀になると、中国王朝の郊祀からの影響や冬至祭との関わりで、冬至の日の出の峰である三輪山が重視されました。ここで生じた変化が、のちに三輪山を「神奈備山」として特別扱いする動向を必然化させたのです（北條2017）。

2. 大和東南部古墳群の配列

そののち弥生終末期ないし古墳前期初頭を迎えると、初期大和政権は唐古・鍵遺跡を放棄して龍王山の山麓地帯に本拠地を新設します。それが桜井市纏向遺跡であり、西暦2世紀末頃に成立しました。この遺跡内には初期の前方後円（方）墳である纏向型前方後円（方）墳が築かれ、その最終段階で登場したのが箸墓古墳です。

私が主張する大和東南部古墳群とは、この箸墓古墳を南端に配し、天理市西山古墳を北端に配

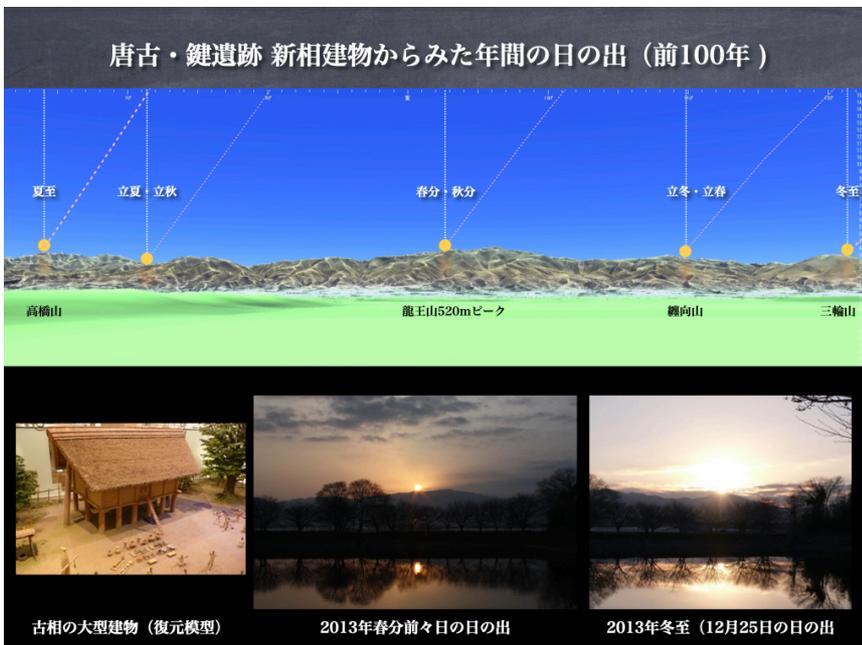


図1 唐古・鍵遺跡からみた年間の日の出と龍王山山帯の嶺峰



図2 大和東南部古墳群の全体配列（唐古・鍵遺跡からみた二分の嶺が背景上の頂点）

する一方、頂点には天理市西殿塚・東殿塚を築き、全体が籬壇状の配列を呈する前期の大古墳群です。西山古墳の墳丘軸線は高橋山に向けられ、箸墓古墳は弓月岳409mピークに向けられました。高橋山が唐古・鍵遺跡からみた夏至の指標であることは先に申しました。一方の弓月岳は、唐古・鍵遺跡からだと巻向山の前景として映ります。そのため中国側の暦の知識があったとすれば、の話ですが、立春・立冬の峰と同一視された可能性もあります。

この古墳群全体は龍王山山帯の斜面から裾部にかけての展開ですが、背景の頂点は龍王山520mピークです。この点は箸墓古墳後円部と西山古墳前方部周溝が同経度であり、2基古墳の中間点の緯度が龍王山520mピークの緯度と一致することから明らかです。唐古・鍵遺跡からみた春分・秋分の峰が、この古墳群の背景上の頂点に選ばれたのです（図2）。

こうした古墳群の配列は、本拠地を山際に移した古墳時代にあっても、奈良盆地の弥生文化が日の出暦の指標としてみつめ続けた峰峯への意味づけが、倭王権のもとでも継承されたことを物語るとみてよいでしょう（北條2012・2017）。

ちなみに高橋山の麓には石上神宮が置かれ、高橋山の磐座は石上神宮の元宮だとの地元側の伝承があります。三輪山は大神神社の神体山ですし、龍王山の麓には大和天国魂神社が配されています。弥生文化の日の出暦は、このような形で顕彰され続けてもいるわけです。これら三峰の総称が『古事記』・『日本書紀』に記された「御諸山」・「三諸山」であることも確実です。いわば奈良盆地における最初期の「大和三山」であり三聖山だったのです。

3. 纏向古墳群と周辺景観

では箸墓古墳の築造より前の段階に築かれた初期前方後円（方）墳や関連施設は、どのような様相を示すのでしょうか。纏向古墳群に属する数基の古墳のそれぞれの中心軸線が視準する先を考古天文学の手法に則して点検してみました。その結果は、年間の太陽や月の運行範囲に収まる古墳3例（石塚・勝山・矢塚）、建物2例（辻地区建物1・2）、天の北極を向く古墳が1例（メクリ1号）、龍王山520mピークを向く古墳1例（東田大塚）、既存の人為景観を視準する古墳2例（ホケノ山・稲荷山）となりました。なおホケノ山古墳の後円部埋葬施設は、墳丘の軸線とは斜交する一方、この時代の北斗七星の柄の先が冬の夕暮れ時に建つ情景、「斗建」の方位を指したものと評価できます。

太陽や月の運行に沿わせる伝統的な坐東朝西の方位観念を古相と呼べば、纏向古墳群では古相



図3 纏向古墳群（箸墓古墳とホケノ山古墳、稲荷山古墳などを除く）と関連施設の方位

を採用するものが圧倒的に優勢です。そのうえ各古墳の軸線が全く揃わない点は、この古墳群がもつ最大の特徴です。先に造られた古墳の軸線を決して踏襲することなく、すべて新たに選定し直されたようです。周辺の山並や天体への輪番的な奉祭だといえます（図3）。

その一方、天の北極を視準するメクリ1号墳は、新相の方位観念すなわち北辰信仰に依拠した古墳です。ただし墳丘軸線は真北からの誤差が 0.2° 未満であり、驚異的な正確さをもつ事例として注目されます。「斗建」との関係が指摘されるホケノ山古墳も北辰信仰への傾倒が顕著な事例といえ、古墳時代前期（布留1式期）に普遍化する「北枕の思想」（都出1979）の先行的導入例として注目されます。上記の作業結果をみれば、一部に先駆的な様相を示すものの、纏向古墳群は総じて弥生文化の伝統を色濃く反映するものだと理解されるのです（北條2022b）。

4. 纏向大型建物Dと日の出暦

では2009年に調査された纏向遺跡辻地区の大型建物群を考えます。最大の建物D（庄内3式期）の正面観が弓月岳409mピークであることは調査時に観察されました。さらにこの建物が廃絶された直後に箸墓古墳の造営を迎え、同じく弓月岳に軸線を揃えることまではわかっていたのです。ただし当時はそれ以上の考察に踏み込めませんでした（図4）。

しかしごく最近になって、ようやく解答が導けました。後述する福岡県平原1号墓とは異なり、東側に大柱は介在しない可能性が高いので、ここでの日の出の定義は、太陽の下端が山の稜線に接した瞬間（定義②-民俗定義）としています。この建物からだと、三輪山は立春・立秋の日の出の峰となります。冬至の日の出は三輪山南斜面の五合目付近の鞍部からとなります。また夏至の日の出は龍王山南斜面八合目付近からです（今回の天体計算はユリウス暦の西暦237年、高い月の極大期を選びましたが、グレゴリウス暦の現在でもおおむね変わりません。黄道傾斜角の減少の結果、夏至と冬至の日の出方位がそれぞれ太陽半個分狭くなっているにすぎません）。

そして正面の弓月岳からの日の出を迎える期日は4月12日と9月3日の両日となりました。現



図4 纏向遺跡辻地区大型建物Dからみた年間の日の出と高い月の出範囲

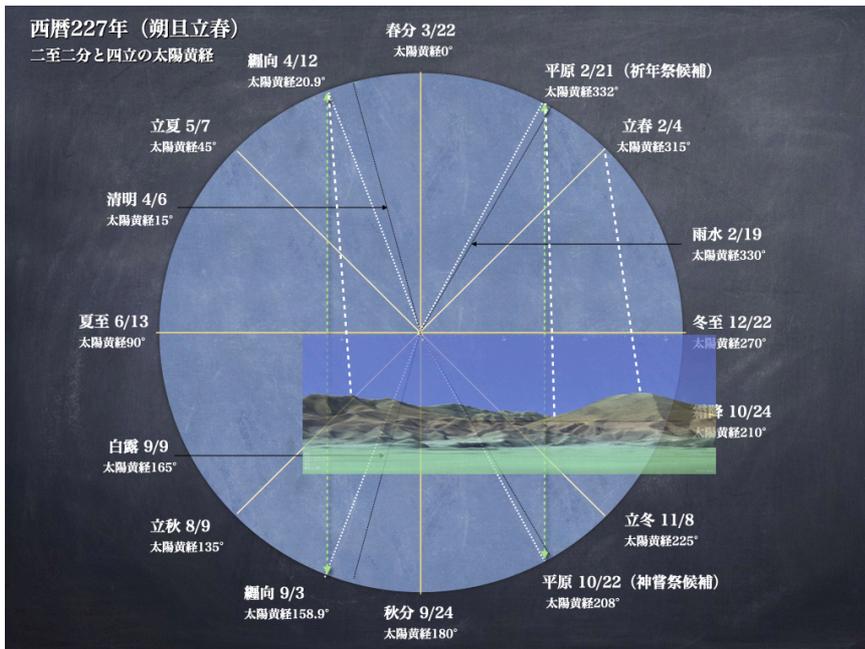


図5 二十四節気の太陽黄経と日の出方位の対応関係および纏向遺跡からみた当該春秋両日の情景との関係



図6 纏向大型建物からみた日の出暦と平原農事暦との対応関係

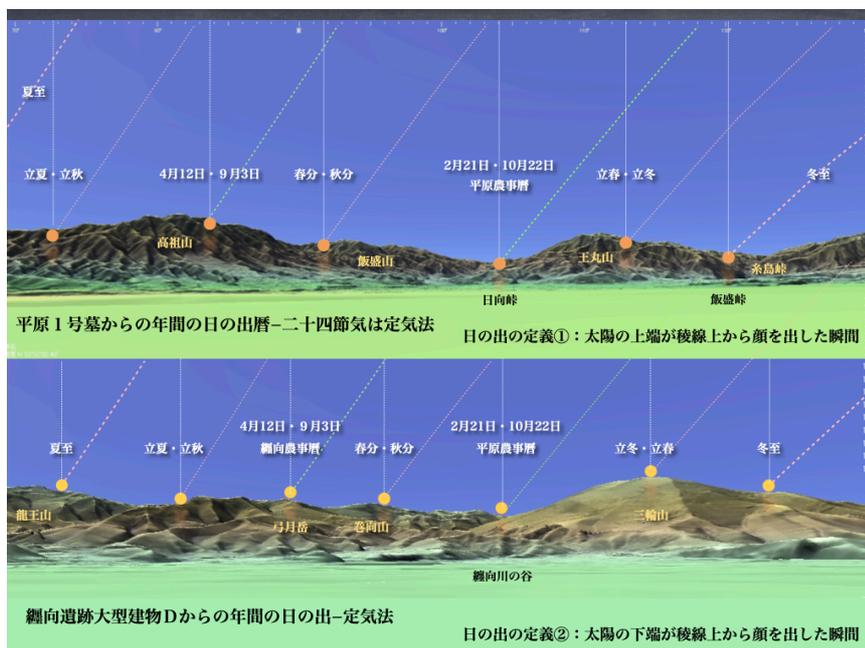


図7 福岡県平原1号墓からみた日の出暦と纏向遺跡大型建物Dからみた日の出暦の情景

在の伊勢神宮の祭礼に照らすと、前者は「神田下種祭」、後者は「抜穂祭」に該当します。両日はじっさいの稲の種蒔きと稲刈り期ともおおむね対応するため、この建物で実施された重要な祭礼は稲作に関わるものであったと推定して差し支えないと思います。このようにして導かれた両日を「纏向農事暦」と仮称することにします（図5・図6）。

しかしこの点以上に注目されるのは、三輪山の北斜面三合目付近で巻向山の南斜面と交わる纏向川の谷間からの日の出が、2月22日と10月20日となる事実です。平原農事暦（北條2017）と一致するのです。日の出の定義を太陽の上端が山の稜線から顔を出す瞬間（定義①-天文学上の定義）とすれば、同じ地点からの日の出となる期日は2月21日と10月22日だからです。

つまりこの大型建物Dからみた場合でも、平原農事暦は非常に良く似た日の出の情景のもとで認知されたとみるべきでしょう。この酷似が偶然の一致とはみなせません（図7）。

5. 日の出暦への転写と模倣-平原から纏向へ-

そこで以前の拙著（北條2017）の不備を補う意味でも、改めて平原1号墓の検討を実施することにしました。原田大六氏によって1965年に発掘された、伊都国女王の墓だといわれる重要墳墓です。原田氏は埋葬の足下側の延長上にある日向峠からの日の出が10月20日であることに注目し、この日取りは伊勢神宮の神嘗祭の祭礼日に当たると指摘しました。さらに、この方位に彼女の遺体を寝かせたことの意味は、朝の陽光によって太陽の子を宿らせるためであった、との説を唱えたことで知られます（原田1966）。

その後1988年から実施された2次調査では、埋葬からみた日向峠の方角上に大柱（東大柱と呼称）が立てられていた事実が判明し、原田氏の感光受胎説もそのままでは成り立たない状況となりました。また1号墓の西側近隣からも別に2本の柱跡（柱1と柱2）が検出されました。拙著ではこの所見をふまえ、東大柱から朝の最初の影が墓壙の中心を貫く期日として2月21日と10月22日を導きました。それを平原農事暦と呼んでいます。

しかし上記の両日は、当時の二十四節気の雨水（正月中気）と霜降（九月中気）に相当するはずだとの重要な指摘を、日本カレンダー暦文化振興協会（暦文協）の石原幸男氏から受けました。古代中国の暦法では、二十四節気の算出を「平気法」で行っていたため、現在の「定気法」とは1～3日程度の誤差が生じる場合があるとの指摘です。この問題については細井浩志氏の著作でも解説され、対応表も掲載されていました（細井2014,18頁）。暦の素人が不用意に手を出すと痛い眼に遭う事例だというほかありません。しかし重要な指摘を頂戴し、収穫は大でした。

私が常用する天体シュミレーションソフト〈ステラナビゲーター（11）〉は、地球が太陽の回りを楕円軌道で公転し、かつ太陽は中心から外れ、冬至付近では地球との距離が最も近く夏至付近では最も遠くなる現象に沿って各種の天体現象が再現されます。二十四節気についても、実際に太陽黄経が15°動く期日を表示するシステムです。これが「定気法」なのですが、この計算法だと紀元150年の雨水は2月19日、霜降は10月24日となり「平気法」とは春・秋共に2日間の誤差が生じます。これでは中国暦法との比較を試みる作業とはなりえません（図8）。

一方の「平気法」とは、年間（当時は365.25日）を24等分した15.22日をもって太陽黄経が15°変化する期間とみなすものです。いわば「等分に割り振られた二十四節気」なのであり、古代中国の太陰太陽暦はこちらが利用されました。月の満ち欠けが一巡する1朔望月は平均29.5日ですから、15.22日はその半分強として、およその対応関係にある点も重視されたようです。また19年に7回挿入する閏月の円滑な運用（章法）との兼ね合いもあって「定気法」が開発された後も「平気法」は長期にわたって使用されたといわれます。

そこで改めて「平気法」にもとづく再計算を実施した結果、この遺跡では同時代の二十四節気との対応関係が明瞭であることが判明しました。平原農事暦は春の雨水と秋の霜降の両日とし

大柱相互を結ぶ影が生じる期日の検討（1）春早朝の影-定気法
 (日の出の定義=太陽の上端が顔を出した瞬間(定義①))

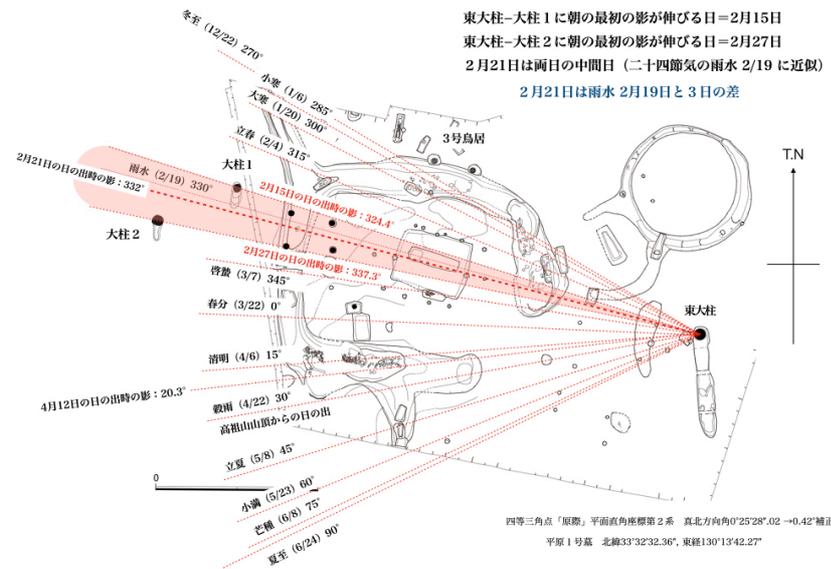


図8 福岡県平原1号墓の東大柱から西側の柱1と2に朝の最初の影が伸びる期日と平原農事暦の関係および二十四節気の日の出との対応関係-春夏定気法

大柱相互を結ぶ影が生じる期日の検討（3）春早朝の影-平気法に変換
 (日の出の定義=太陽の上端が顔を出した瞬間(定義①))

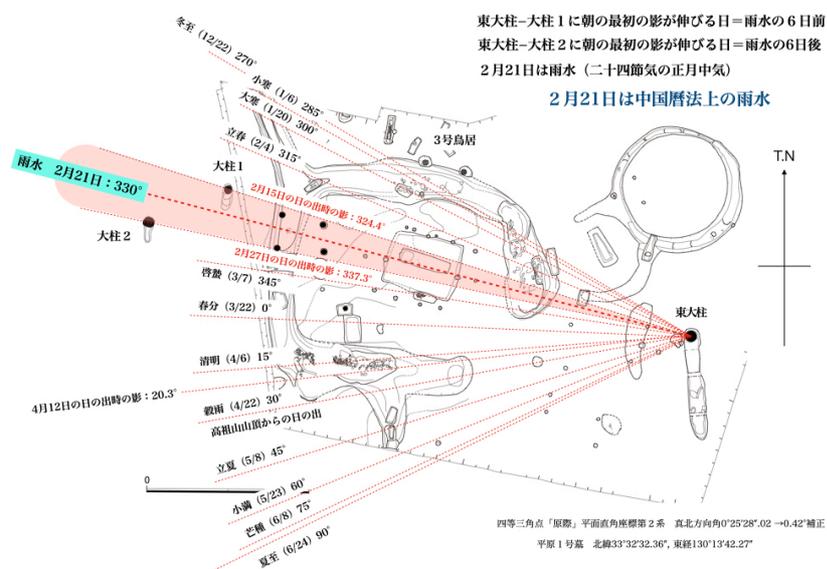


図9 福岡県平原1号墓の東大柱から西側の柱1と2に朝の最初の影が伸びる期日と平原農事暦の関係および二十四節気の日の出との対応関係-春夏平気法に転換

大柱相互を結ぶ影が生じる期日の検討（4）秋日没直前の影-平気法に変換
 (日の出の定義=太陽の上端が沈む直前(定義①))

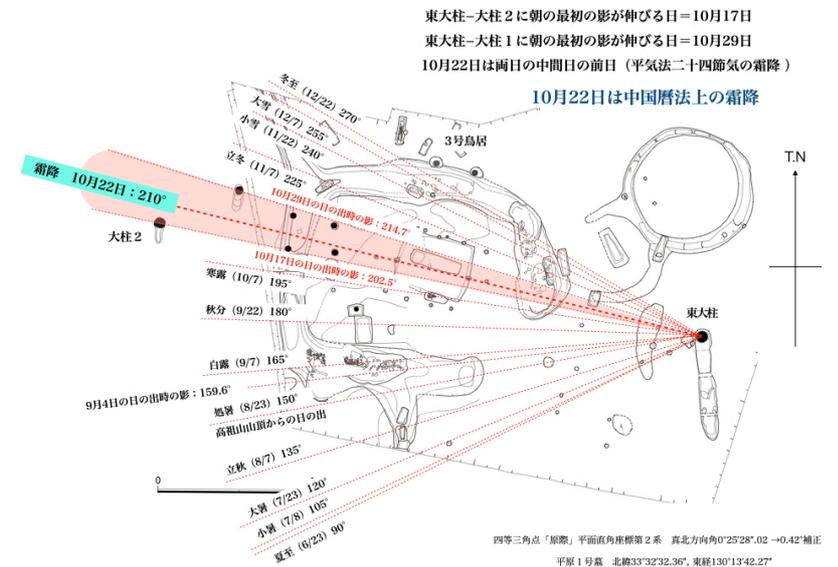


図10 福岡県平原1号墓の東大柱から西側の柱1と2に朝の最初の影が伸びる期日と平原農事暦の関係および二十四節気の日の出との対応関係-秋冬平気法に転換

た。東大柱から伸びる朝の最初の影が柱1に重なる期日は雨水の6日前であり、東大柱から柱2に影を伸ばすのは霜降の5日前でした。大柱間を結ぶ早朝の影によって両日の接近を予知させる仕掛けだったのです(図9・図10)。

日の入時の影については穀雨と処暑に、柱1と柱2から伸びる影は墓壇の南北両辺に重なります。さらに立夏と立秋には、柱1から伸びる影が埋葬の中心を貫きます。彼女の埋葬頭位は両日の日没方向「去にし」だったのです(図11・図12)。日時計とは、柱から伸びる影が西から北へ、そして東へと伸縮しながら変化する現象を利用するものです。平原1号墓の場合は、季節の変化に応じて影の起点と終点が南北に移動する現象を捉えるものであったと同時に、影の出発点と帰着点を見据え、記憶すべき期日の「日向かし」と「去にし」の双方を影によって表象するものだったといえるでしょう。

こうした現象が認められる以上、平原1号墓では日の出暦だけでなく日の入暦も併用されており、平原農事暦の設定を主眼に、古代中国側の高度な暦法が模倣されたと判断すべきことがわかります。具体的には、年間の日数を365.25日とし、二十四節気の名称と順序が整ったとされる後

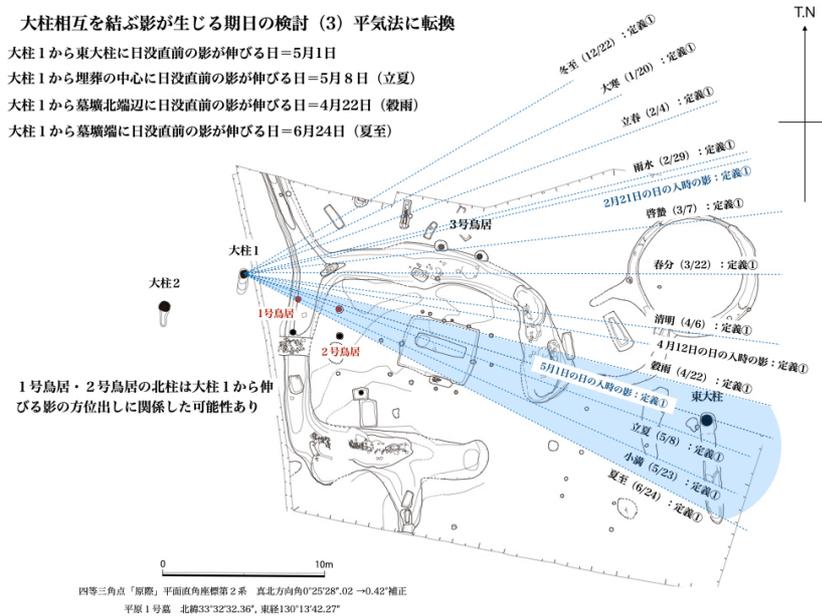


図11 福岡県平原1号墓の大柱1から東大柱に日没直前の影が伸びる期日と二十四節気の日に入りとの対応関係-冬春平気法に転換

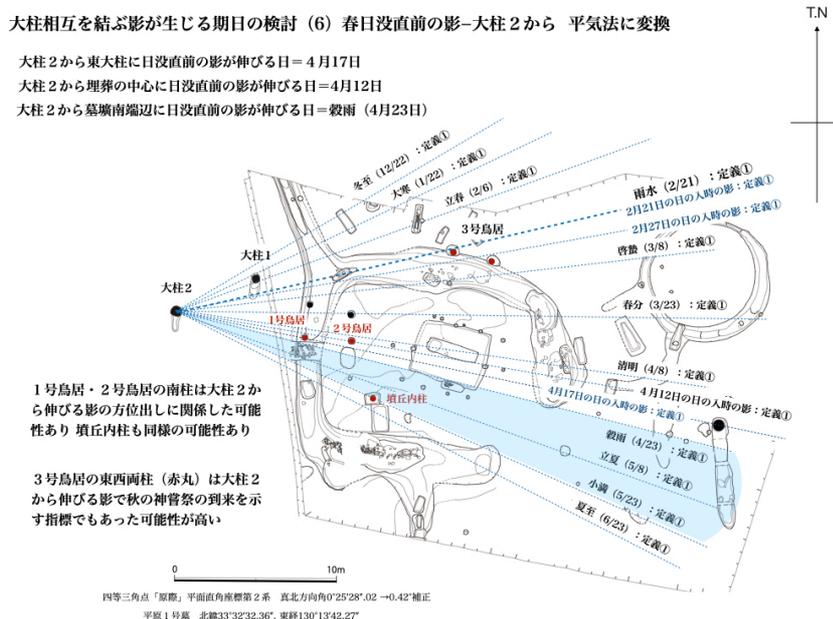


図12 福岡県平原1号墓の大柱2から東大柱に日没直前の影が伸びる期日と二十四節気の日に入りとの対応関係②-夏秋平気法に転換

大柱相互を結ぶ日没直前の影が生じる期日の検討（平気法に転換した結果のまとめ）

大柱2から大柱1に日没直前の影が伸びる日＝立春（2/4）と立冬（11/8）

大柱1・大柱2から伸びる影が墓壙の南北両長辺と重なる日＝穀雨（4/23）と処暑（8/23）

大柱1から本棺の中心に影が伸びる日＝立夏（5/8）と立秋（8/7）

雨水と霜降の日没直前の影は大柱2から3号鳥居西柱付近に伸びる

4月12日と9月4日の日没直前の影は大柱2から墓壙の中心に伸びる

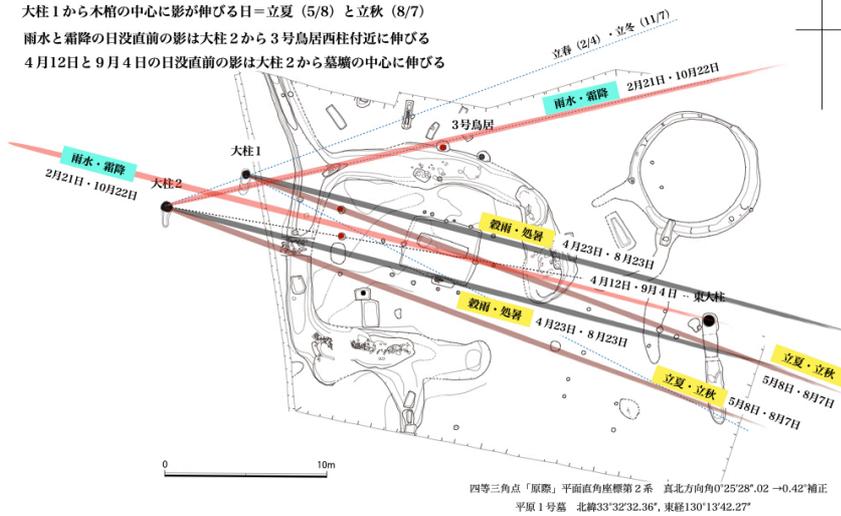


図13 福岡県平原1号墓3本の大柱から伸びる早朝と夕暮れ時の影は二十四節気の特定の期日と対応し、遺構の要所に伸びる状況

漢の四分曆が有力候補です（図13）。

中国側の太陰太陽曆に精通した人物が2世紀のどこかで伊都国を訪れ、平原遺跡を含む三雲遺跡の要所に柱（圭表）を用い、日の出・日の入曆に転写する恰好で、倭人向けの曆計を設置した可能性は高いといえるでしょう。曆計は複数の地点に設けられた可能も高いので、それを「三雲・平原曆計」と仮称します。

なお唐古・鍵遺跡のところで述べたような日の出曆の場合、日の出範囲の両極間を二分する〈二分〉だけでなく、日の出の峰の間隔を測って三分割したり四分割したり、という形で特定の日取りをセットすることもできるでしょう。しかしこのような手法によって二十四節気との対応関係を導くことなど不可能です。冬至を起点に経過日数や朔望月を数えるとしても、そもそも冬至をピンポイントで確定するためには、太陽の南中時の影を数日間にわたって観測・計測する必要があります。事前に正確な子午線を引いておかなければなりません。あるいは齊藤国治氏が指摘するような、日の出の場所が停止する約10日間を数え中間日を冬至とする手法もあったかもしれません（齊藤1992）。しかしどちらであっても相応の知識と経験則が求められます。

弥生文化の中で、こうした冬至の確定法が自生的に醸成された可能性があるのかと問われれば、回答は否定的だというほかありません。同時代の文明側からの模倣と借用であった可能性のほうがはるかに高いのです。楽浪郡の設置（紀元前108年）より前の段階から、伊都国は文明側との接触地点でした。その意味でも平原1号墓で確認された様相の背後には、中国曆法の知識が介在したと断言できるのです。「平気法」をもとに正確な曆上の指標を抜粋し、より原初的な日の出・日の入曆へと逆に変換させる工夫があったといえるのです。

無文字社会であった倭国に高度な曆法が抜粋的に模倣・転写され、それをモニュメントに刻みつけた物的証拠、それこそが平原1号墓と東西の3本からなる大柱であったと私は考えます。

なおこの点に関連して、当時の倭人の自然曆を記したとされる「魏志倭人伝」中の有名な記事「計春耕秋収為紀年」に言及しておきます。この記事は「常停伊都国」と抱き合わせて理解される必要があります。当時の伊都国内の様子を知る人物からの伝聞だったと推定できます。魏の使節が平原1号墓を訪れ3本の大柱を実見した可能性も高く、それが「計春耕秋収」の根拠であったと思われます。しかし当該記事の前段にある「不知正歳四節」は完全な事実誤認だったといえるでしょう（図14）。

なお纏向遺跡大型建物から導かれる4月12日と9月3日については、平気法による二十四節気

とも整然とは対応せず、明確ではありません。

では以上の検討結果をふまえ、平原遺跡や三雲遺跡内からみた日の出の峰の情景を、纏向遺跡からの情景と比較してみます。先に述べたとおり、平原農事暦はどちらも山間部の窪み（平原-日向峠、纏向-纏向川の谷間）からの日の出となる点で一致しますが、それ以上に注目されるのは立春・立冬の峰（平原-王丸山、纏向-三輪山）の類似です。双方の山の形状も酷似して映るのです。南斜面の中腹に冬至の日の出を位置づける様相も同じです（図15）。

ようするに三雲遺跡の様相を熟知した人物「日知り=聖」が直接奈良盆地を訪れ、東側の山並の情景が故地と類似する場所を探し求めた結果、誕生したのが纏向遺跡の大型建物Dであったと考えられます。つまりこの建物は、三雲・平原暦計からの二次的な移植によって成立した祭礼空間であった可能性が高いのです。

もちろん春4月12日と秋9月3日の両日については、纏向側のオプションな設定だった可能性を否定できません。建物群の西側には石塚古墳や矢塚古墳が直列的な配置をもって築かれた事実を考慮すると、祖霊祭祀との関わりで弓月岳を遙拝する恰好でもある点が気になります。冒頭で上映した吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓-北内郭-雲仙の直列配列とも対比できる様相ですから、弓

福岡県平原1号墓（弥生終末期）にみる日の出と暦

「魏志倭人伝」の注に引かれた『魏略』の記事

「魏略曰 其俗不知正歳四節 但計春耕秋収為紀年」

「『魏略』の記すところでは、倭人は正しい暦法やそれに則した四季の区別を知らない。ただし春の耕作秋の収穫を計ることによって年々の単位とする、とある」

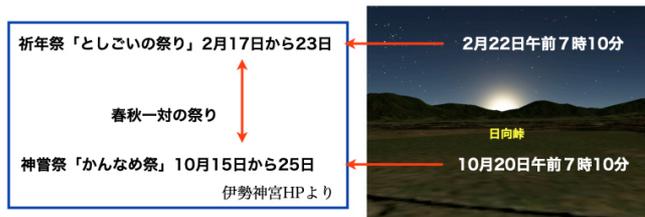


図14 「魏志倭人伝」中の記載と福岡県平原1号墓3本の大柱から伸びる影との関係

「魏志倭人伝」の他の箇所には「常停伊都国」とあるので、魏側の使節は伊都国内で倭人の習俗を観察したことも確実視される。彼らが汲み取った倭人の日の出暦は日向峠からの日の出となる期日を重視するものだったと推測される。しかし平原1号墓の実態は「正歳四節」を熟知した日の出暦計であった。

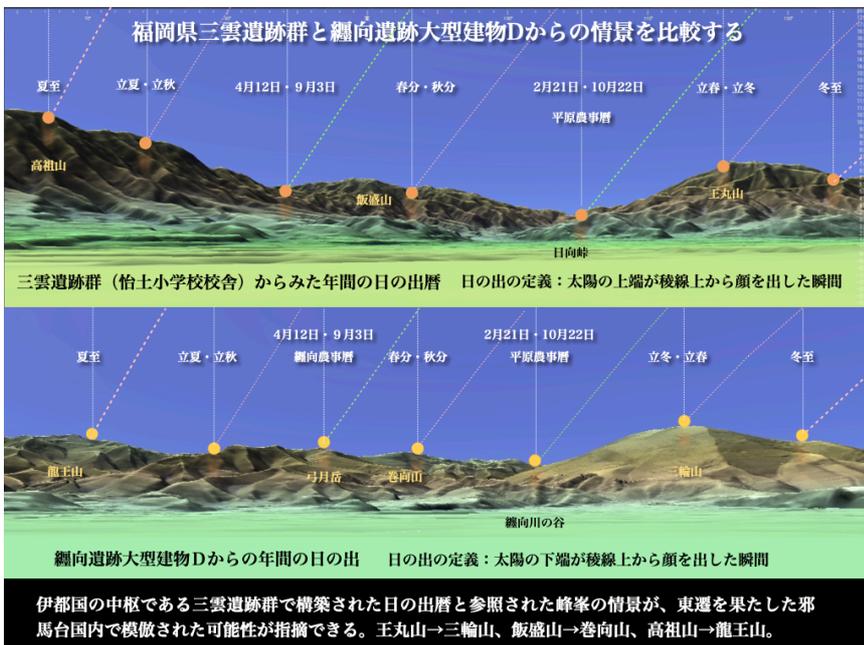


図15 三雲・平原暦計（仮称）と纏向日の出暦の酷似状況

月岳は雲仙の立ち位置に配された、ともいえるでしょう。三雲遺跡側の今後の発見例を待つて再考する必要もあると思います。とはいえ、現在の伊勢神宮で執り行われる神田絡みの春秋祭礼日との一致には驚かされました。目下、文献史学者に話題を投げかけて検討を依頼しています。

6. 奈良盆地に誕生した坐東朝西ランドスケープデザイン

さて、唐古・鍵遺跡からの日の出暦を破棄し、山際に観測点を移設することで成立したとも評価される纏向遺跡の大型建物群ですが、箸墓古墳の築造を最後に遺跡自体が衰退し、布留1式期の4世紀前半には消滅します。以後、古墳時代の全期間を通じて都市景観は日本列島から消滅しました。

その代わり活性化したのが巨大前方後円墳の造営でした。先に述べた大和東南部古墳群の誕生を迎えるのですが、この段階になると箸墓古墳を南端に置く恰好で全体構図に大幅な改変が加えられました。頂点には西殿塚・東殿塚古墳が新造され、北端に西山古墳が築かれたことによって、龍王山520mピークがこの古墳群全体の背景上の頂点となりました。こうして大和弥生文化の伝統的な春分・秋分の軸線として記憶されてきた、唐古・鍵遺跡を起点とする坐東朝西のランドスケープデザインは誕生したのです(図16)。

つまり初期倭王権は纏向遺跡に本拠地を定めたものの、それは長続きせず、おそらく政治的な変動もしくは世情不安を機に、再度伝統への回帰に向かわざるをえなかったのだと思います。

参照すべき事象としては「魏志倭人伝」に記された、卑弥呼死去後の混乱から臺代の擁立による事態収束までの一連の動向が想起されます。また世情不安としては『日本書紀』崇神紀にある疫病の蔓延と、その対処策が該当しそうです。日本大国魂神の奉祭殿と天照大神のそれとの同居状態を解消させ、祭礼場所を分離独立させた一件です。このとき豊鋤入姫に託して天照大神を祭る「磯堅城の神籬」が新設されたとあり、その所在地「倭の笠縫邑」の比定地としては磯城郡田原本町新木が候補である点も示唆的です。唐古・鍵遺跡の近隣だからです。

直接の原因はもちろん不明ですが、箸墓古墳の造営後に発生した復古策の結果、坐東朝西のランドスケープデザインは大和東南部古墳群の配列に刻まれました。それが5世紀代の古市・百舌鳥古墳群の配列にも強い影響力を発揮することとなり、この景観設計は古墳時代のほぼ全期間を通じて奈良盆地から大阪平野までを貫いたのです。岸俊男氏が早くに指摘した畿内四大古墳群の東西直列配置(岸1970)はこのような形で再評価できます。

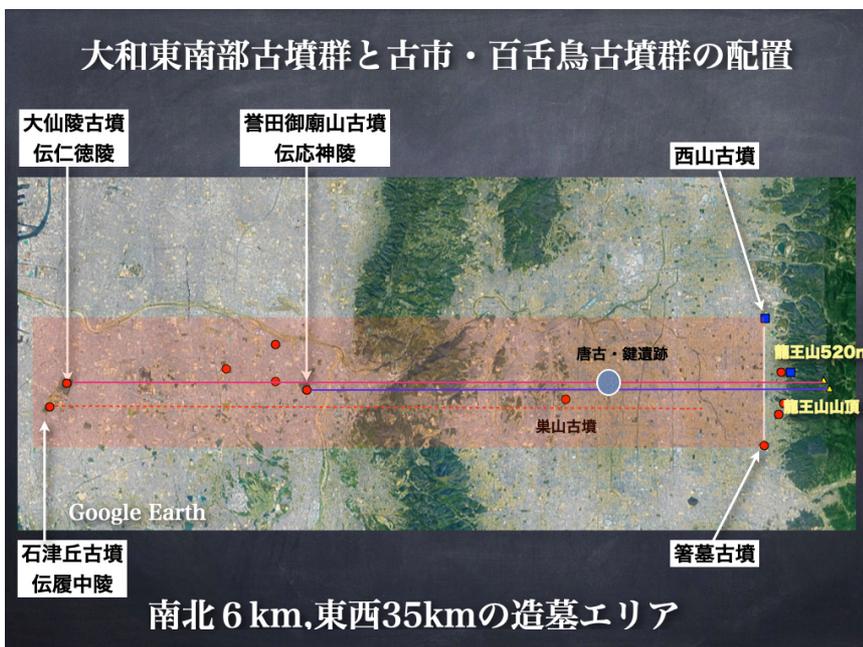


図16 龍王山520mピークの真西(同緯度)に築かれた大仙陵古墳、龍王山山頂の真西(同緯度)に築かれた菅田御廟山古墳および西山古墳の緯度と箸墓古墳の緯度が古市・百舌鳥古墳群の範囲を規定した状況

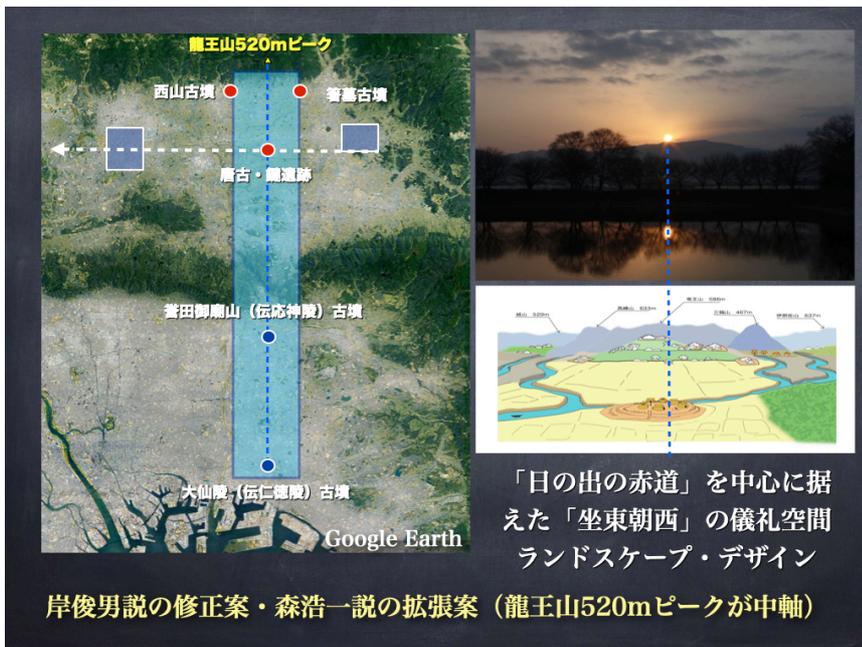


図17 唐古・鍵遺跡を中心に据えた古墳文化の坐東朝西のランドスケープデザインと、藤原京から平城京へと遷移してゆく飛鳥期以降の坐北朝南のランドスケープデザイン、もしくは南の崇山から発する龍気が守護する古代都城の配列関係

風水的な表現をとれば、「日向かし」でもあり水源地側でもある龍王山は「崇山」であり、そこから発する「龍気」が造墓地に流れ込み、それぞれの古墳の被葬者から生じる「魄」を乗せ、それが子孫の繁栄と安寧を永遠に保証するであろうと祈念される、そのような人為景観だったといえるでしょう（渡邊1994参照、図17）。

ところで、弥生終末期に確認される中国暦法からの模倣・転写の痕跡は、纏向大型建物を最後に途絶します。倭国内で系統立った暦の使用が明確になるのは、5世紀後半の雄略朝を待たなければなりません。朝鮮半島百濟王朝から派遣された渡来知識人が宋の元嘉暦を移植したのだといわれます（細井2014）。東アジアの周辺地帯では、幾度かの到来を重ね、模倣と忘却との間を往来したのが古代中国の太陰太陽暦であり、古墳時代の倭人社会は文明側の暦への接近と自然暦への回帰を繰り返したとみてよいでしょう。平原から纏向への日の出暦の移設は、そうした歴史の一断面でした。しかしその記憶は、やがて神武東征譚へと昇華したのだと思います。

私の報告は、時間の都合で60分間に圧縮することになりますが、お伝えしたいことの全体を綴りました。ご静聴とご一読をありがとうございました。

【引用文献】 *個別調査報告書は割愛

- 荒川 紘2001『日本人の宇宙観-飛鳥から現代まで-』紀伊國屋書店
岡田芳朗1982『暦ものがたり』（角川ソフィア文庫）角川書店
岸 俊男1970「古道の歴史」『古代の日本（5近畿）』角川書店
斉藤国治1992『古天文学の散歩道』恒星社
都出比呂志1979「古墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻3号
原田大六1966『実在した神話』学生社
北條芳隆2012「東の山と西の古墳」『考古学研究』第59巻4号
北條芳隆2017『古墳の方位と太陽』同成社
北條芳隆2022a「吉野ヶ里遺跡と北限の満月」『モノ・コト・コトバの人類史』雄山閣
北條芳隆2022b「纏向古墳群と周辺景観」『纏向学研究センター10周年記念論集』桜井市（7月刊行予定）
細井浩志2008「中国天文思想導入以前の倭国の天体観に関する覚書-天体信仰と暦-」『桃山学院大学総合研究所紀要』第34巻2号
細井浩志2014『日本史を学ぶための〈古代の暦〉入門』吉川弘文館
楊 寛著/西嶋定男監訳1987『中国都城の起源と発展』学生社
渡邊欣雄1990『風水思想と東アジア』人文書院
渡邊欣雄1994『風水 気の景観地理学』人文書院